



紹介者

本田 博人

日本キャタピラー合同会社
代表職務執行者 社長・CEO

藤本 昌義

双日
取締役社長CEO



マグロの養殖事業を通じ、地方創生に思う

先日、当社が12年にわたり続けてきているマグロの養殖事業(ツナファーム鷹島)の視察のため、長崎県の松浦市鷹島を訪れました。この日は、ある大手寿司チェーンよりオーダーが入り、現場社員は皆忙しく働いていました。生け簀すの中に3人のダイバーが潜り、電気棒でショックを与え、マグロの尾に輪っかを通し、仮死状態のままクレーンで船上に引き上げると、船上では5人の若者がマグロを活めにして、船倉の氷水プールの中にマグロを放り込む、この一連の作業が、見事に、そして手際よく行われていました。その日に揚げたマグロは計70尾(中には100キロを超えるマグロもあり)、われわれの到着前の朝早くから昼ごろまで、冬場の寒い中での重労働であるにもかかわらず、港に戻る船上での若者の顔には笑顔が溢れていました。

当社がマグロの養殖事業を始めた2008年、当時はマグロの資源枯渇が問題になり、大西洋では厳しい漁獲制限が課せられた時期でした。当初は、機械化が進んでおらず、生け簀の中からマグロを一本釣りで釣り上げ、人力で船上げするなど大変な作業だったと聞きました。また、玄界灘の冬の水温が低く、稚魚が育たない、生け簀の網が破れて、マグロがいなくなるなどの失敗続きで、何度も事業存続の危機に瀕しました。

その後、作業の機械化・効率化を検証、実践するとともに、肥育方法の改良と試行錯誤の末、現在では4万尾のマグロを肥育し、年間1万尾余りを出荷するまでに育ち、従業員も当初の6人から30人までに増えました。地元高校を出て、ここで働く若者は、地元で働けること、その事業の意義に誇りを感じ、頑張ってくれています。

今、地方創生に思うのは、若者の雇用を生む事業の創設が大事だということ。そのためには、その地方でしかできない事業をやる必要があります、それは第一次産業にあると私は考えます。事業化・収益化は決して簡単ではありませんが、粘り強く続けていく努力が必要です。また、各種規制を緩和していただくことも必須で、引き続き政府に働き掛けていきたいと思えます。

まずはツナファーム鷹島の堅固な事業基盤を確立し、事業拡大を図ることで、多面的な社会的価値を創出することが当社に課された使命だと考えています。

▶▶ 次回リレートーク

小笠原 信

ロシュ・ダイアグノスティックス
取締役社長 兼 CEO